

研究雑話(5)

「ぶら下がる力があれば、目線と声かけの権威」(E,セガン) 手は突き出た大脳・セガン教育の原理(三) 藤井 力夫

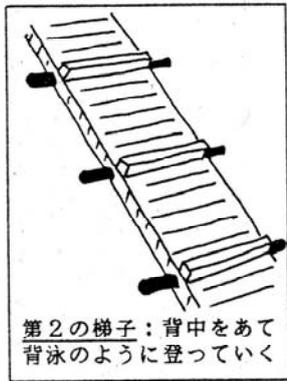
前回は、障害児を前にして、彼らが共通して猫背で胸が落ち込んでおり、足を引きずって歩いていること。身体の構造が問題で、これを何とかしなければならぬ。「まずは胸を張って歩けるように」と、E・セガンが考えたところをお話しました。では、どのようにしてそうした力を形成しようとしたのでしょうか。一八四一年の実践では次の三つの方法を導入しました。我々は足腰の弱さへの目線がいきますが、セガンは肩や手の力に注目しました。当時、進化の中のブラキエーション(樹上生活での猿の枝渡り)の意味についてどのように認識していたかわかりませんが、セガンが最初から手や肩の問題に着目していたのはさすがというより外ありません。

「方法一」。セガンが行った第一の方法は歩行の時に鉄鉦鈴を持たせたことです。これは私も実際に養護学校低学年の子どもたちに体育の時間をかりて一年間実施したことがあります。とても効果のある方法です。物を持つことにより肩の余分な力が抜けるのです。そして都合の良いことに「あそこまで運ぶのだよ」とかの声掛けにより心に張りができるというか、子どもをとんでも生き生きとした気持ちにさせるのです。身体が立ってくるとでも言ったらいよいよか。さらには力を抜くことを覚えた肩は、普通に歩くときには手を交又させるのです。これには本当にびっくりさせら

れました。運ぶということに頼まれた誇りが身体を立て、しっかりした歩行へと導いた訳です。「方法二」。第二の方法は梯子を利用したことです。それも用途の違う二つの梯子を用いました。一つは普通の煉瓦職人のものであった。

「私は子どもたちの手を取りながら前面を登っていった。手をはなして逃げて行ってしまいう子、足をあげると手を降ろし、手をあげると足を降ろしてしまいう。誰一人として交互に登ることができない。手と足を揃え揃えで登るのでやっとならな。しかし、足を払いのけると、ぶら下がることはできる。目線とかけ声の権威。手は汗でいっぱいであるが、恐怖心に帰することはできない。彼らはいままで手足を同時に交互に使うということをしたことがなかったのだ。あらゆる運動の基礎となる手と足の共同運動の自動化を形成しなさいきたのである」(一八四一年十月)。

「方法三」。もう一つの梯子(図)は石切り工のそれで、背中をあて背泳のように登っていく。



「後ろ向きになって地面よりすぐ上の横木に足をのせ、手は頭より高い取っ手を握り、交互に登る。足を外



F. アモロスの市民体育練習場(1820年代、パリ)

すとぶら下がりになるが、背中をつけるに楽になる。そうして足の支点を交互に登るが、代償として両肩が広がり、胸が出る」(同)。

ル塔のあたりの対岸(セーヌ川)にあった市民体育練習場の様子である。ナポレオンの軍隊がロシア遠征に失敗し、王政復古の時代に入る。どのように市民の体力を維持するか、これが新たに問題となった。F・アモロスは内務大臣の要請とパリの援助を受け、訓練計画を提出した。梯子やロープを登ったり、壁をよじ登ったり。梯子の高さは五メートル。命を守るために足腰とともに肩・上肢の力が大事だとされた。アモロスはバネ式の握力計と背筋力計を考案(一八三九年)し、体力診断に取り入れたのであった。

(北海道教育大学助教授)